

ron tulipifera L.) はテダマツに隣接して植えられるが、肥大生長が特に著しい。然し風害を受け易

く、梢頭の損傷がひどく、かつ枝下高短かく良材となし得ないようである。

現在樹種の成長成績

種別	現在面積 1ha	樹令 (林令年)	本数 (1ha当)	直径 (平均 cm)	樹高 (平均 m)	単木材積 (比較材積) m <sup>3</sup>	林分材積 (比較材積) 1ha m <sup>3</sup>	摘 要
テダマツ	0.24	48 (45)	18 (71)	37~60 (49)	25~29 (26)	2.240 (アカマツ0.361)	167.6 (アカマツ261.8)	3年生苗植栽 比較アカマツ1ha当 680本
同上天然生 第二次林	0.10	16	107 (1,070)	8~24 (12)	6~10 (7)	0.060 (アカマツ0.024)	64.5 (アカマツ119.6)	天然下種により成林 但し林地は元林地比 較アカマツ1ha3,542本
ヒマラヤスギ	0.02	46 (43)	10 (100)	34~51 (43)	24~28 (26)	1.9474 (ヒノキ0.471)	987 (ヒノキ526)	3年生苗植栽 比較ヒノキは隣接同 令林
エンピツ ビヤクシン	1.25	— (40)	2,400 (1,800)	8~24 (16)	10~16 (14)	0.161 (ヒノキ0.316)	290 (ヒノキ569)	樹令不明 ヒノキは隣接林分1 ha当1,800本
ハンテンボク	0.07	— (45)	12 (171)	31~74 (48)	18~26 (23)	1.776 (—)	327 (—)	樹令不明

以上の結果より、今後有望な樹種としてはテダマツが第一にあげられ、ヒマラヤスギもこれについて有望である。その他の樹種については、他の試験結果を

俟たねば、わが国における栽植の可能性は分らない。さしあたり風土に適しないとみてよいと思われる。(図表省略)

## 51. スギ、ヒノキ挿木について

出水営林署 田 中 豊

最近林木育種に関する一般の関心が著しく高まり、林業生産の量的質的向上をはかろうとする気運が非常に盛んになって来た。林木育種の重要な手段の一つである挿木は言うまでもない。林木の挿木について実におびただしい数の研究結果が報告されていて、スギにおいては事業的に行われる様になっているが、ヒノキについては現在事業的には殆んど行われていないと云つても過言でない。ヒノキ挿木に就いて現在のスギ挿木程度に迄発根させる事が出来ないものだろうか、その考から第一歩としてこのたび月別処理別にスギ、ヒノキ対照して挿木の試験を行つたので、その結果を発表する。

1. 苗畑の気候昭和30年10月~31年9月の年平均気温は17°Cで、最低-1.4°C(1月9日)、最高30°C(7月27日)、年降雨量2,453mm、土壌は火山灰土壌である。
2. 穂スギは27年生、ヒノキは27年生、ただし昭和31年1月以降は5年生母樹より採取したスギ、ヒノキとも母樹の力枝以上の日当りの良い処の枝で50cmに切り取り、30~40cmの穂長とした。ただし昭和31年1月以降のヒノキは30cmに切り取り、

15~20cmの穂長とした。

3. 挿付の日時 各月共スギは25日、ヒノキは26日とした。
4. 使用薬剤
  - (1) 赤粘土処理後地下40cmの深さの所に堆肥を20cmの厚さに置き、ふみかためて覆土した上挿付けた。
  - (2) αナフタリン醋酸0.005% 12時間処理。
  - (3) ルートン粉剤 挿木苗100本に0.5g粉剤添付した。
  - (4) ルートン液 水1升到ルートン1gを入れた液に1時間処理。
  - (5) トランスプラントン液水2升5合にトランスプラントン2g入れた液に1時間処理。
  - (6) 無処理
  - (7) αナフタリン醋酸0.005% 24時間処理。
  - (8) 28°Cの湯温に1時間後、(7)同様処理。
5. 日覆ヒノキは挿付後直ちに2尺の高さに日覆をなした。
6. 結 果
  - (1) 月別では発根の良いのはスギ2月、1月、12月

の順。ヒノキ4月、1月、2月の順である。  
スギ2月はいつれの処理でも90%以上であるの  
に比し、ヒノキ4月は60~70%である。

- (2) 処理別ではスギは無処理、トランスプラント  
液処理、ルートン粉剤処理の順で、ヒノキはトラン  
スプラント液処理、ルートン粉剤処理の順である。  
スギ無処理最高99%、トランスプラント液98%  
で、ヒノキαナフタリン醋酸24時間処理69%、  
ルートン液処理68%の順である。
- (3) ヒノキの場合10月~12月と1月以降とでは母  
樹の年令穂長が異り、双方比較する事は無理であ  
る。挿木後1年で山行きさせるには1月以降の様  
な穂長では無理であるので、10月~12月の様な  
穂長としなければならない。その時11月のルー

トン粉剤44%、10月の40%であるが、50%にも  
達していない。

- (4) 地温平均1月7°C、2月7°C、3月11°C、4月  
15°C、5月18°C、6月以降は23~28°Cで、ヒノキ  
は気温と地温の差も少く変化も少いので、此の時  
期がよいものかと思料された。
- (5) 7月~9月の挿木はスギは全然発根せず、ヒノ  
キは僅か乍ら発根しスギより発根が早い。ヒノキ  
のカルス形成せず、幹の下端でない所から発根し  
ているものがあつた。
- (6) 結び1回だけの試験で尚今後続けて行きたい  
が、ヒノキに発根阻害するものがあるかも知ら  
ないとしても、他の処理法の研究を行い事業的に  
行われる様致したいものである。

## 52. オビスギに関する調査(3)

—オビスギの地域差について—

飼肥管林署 吉 村 明

### 1. 緒 言

従来オビスギの成立地域といわれているのは宮崎県

南那珂郡の酒谷川、広渡川流域及び宮崎郡田野地方で  
ある。

小論ではこれらの三地域が果して同一母集団とみる

第 1 表

種 別	令 級	資 料 数			自 由 度			$\bar{x}$			$\sigma^2$			SE		
		I 地区	II 地区	III 地区	I 地区	II 地区	III 地区	I 地区	II 地区	III 地区	I 地区	II 地区	III 地区	I 地区	II 地区	III 地区
胸 高 直 径	II	5	13	6	4	12	5	17.86	18.80	16.38	1.65	1.60	0.76	4.58	3.49	1.95
	III	15	12	13	14	11	12	19.90	25.20	20.60	1.32	2.36	0.49	2.83	5.19	1.07
	IV	13	25	17	12	24	16	25.98	26.90	28.54	2.10	1.50	1.46	2.40	3.10	3.10
	V	14	18	12	13	17	11	33.39	34.13	33.12	1.50	1.51	1.70	3.24	3.19	3.74
	VI	10	8	18	9	7	17	39.76	39.88	38.92	1.56	2.90	1.89	3.53	6.86	3.99
	計		57	76	66											
樹 高	II		同			同		10.20	9.70	11.68	0.63	0.88	0.47	1.75	1.92	0.57
	III							12.35	14.19	12.89	0.82	0.89	0.77	1.76	1.96	1.68
	IV							15.36	15.02	15.91	1.01	0.73	0.62	2.20	1.51	1.31
	V							16.14	16.13	16.31	0.90	0.70	0.50	1.94	1.48	1.10
	VI		上			上		17.65	19.70	18.16	1.71	0.75	0.17	3.87	1.77	0.36
本 数	II		同			同		1,496	1,279	1,252	279	148	234	774	322	602
	III							901	954	1,278	83	124	145	179	274	306
	IV							724	842	661	61	45	48	133	93	102
	V							680	522	626	50	50	47	108	106	103
	VI		上			上		423	479	575	22	39	51	50	92	108

備考：酒谷地区（I地区）、広渡川地区（II地区）、田野地区（III地区）としている。